

## 第2章

### 奄美大島の生物多様性の特徴

---



アマミノクロウサギ [写真：平城 達哉]

# 1 生物の多様性が高い

奄美大島の北側には、生物地理区において大きな境界となる渡瀬線が位置しており、動物地理区では旧北区と東洋区が、植物地理区では全北区と旧熱帯区が区分されています。

そのため、アカマタ、ガラスヒバァ、ハブ、ヒメハブ、ハロウエルアマガエル、ヒメアマガエル等の東洋区を分布域とする動物や中琉球の固有種などが奄美大島を分布の北限としています。また、132種の植物が奄美大島を分布の北限としています。一方で北方系の生物も分布するなど、北方系の生物と南方系の生物の混在、豊富な降水量などの特別な環境、地史的な分離・独立の変遷など、さまざまな要素が重なり合って、奄美大島の豊かな生物相が形成されています。

日本全体の生物種として確認されている種数は約38,000種、そのうち奄美大島での確認種数は5,083種となっており、国土の面積の0.2%に満たない奄美大島において、国内全体の生物種の約13%が確認されています。

また、奄美大島は多くの鳥類、チョウなどの昆虫類、ウミガメなどの爬虫類、クジラなどの海棲哺乳類の中継地・越冬地・繁殖地となっていて、これらの生物の来訪があることも生物多様性を高める要因となっています。

近年は、世界自然遺産への推薦・登録によって奄美大島に対する研究者の関心も高まり、研究の進展によって隠蔽種<sup>1</sup>や新種の発見も進んでいます。

## 奄美大島の確認種数

	在来種数			固有種数	
	日本全国	奄美大島	日本全国に対する割合	固有種数	固有種率
維管束植物 <sup>※1</sup>	約7,000	1,307	19%	125	10%
哺乳類	108	13	12%	8	62%
鳥類 <sup>※2</sup>	633	315	50%	2	1%
陸生爬虫類	72	16	22%	10	63%
両生類	74	10	14%	9	90%
陸水生魚類	約400	154	39%	9	6%
昆虫類	約30,000	3,254	11%	695	21%
陸水生甲殻十脚類	73	14	19%	3	21%

※1：亜種・変種を含む。 ※2：渡り鳥及び迷鳥を含む。

〔出典：「世界遺産一覧表記載推薦書 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島（仮訳）（2019年1月）日本政府」をもとに作成〕

## 奄美・沖縄における北限・南限種（植物）

区分	地域	種数	区分	地域	種数
北限種	奄美大島	132	南限種	奄美大島	20
	沖縄島	54		沖縄島	73

〔出典：「国立・国定公園の指定及び管理運営に関する検討会」第2回指定分科会資料（環境省 自然環境局 国立公園課）〕



アカマタ

〔写真：浜田 太〕



ハロウエルアマガエル

〔写真：常田 守〕

### 1 隠蔽種

本来は別種であるが外見上の区別がつかないため、同一種として扱われていた種。遺伝子の塩基配列等を調べる分子系統学的手法で、別種が存在が明らかになることが多い。例えば、かつて九州南部から琉球列島にかけて広く分布するヤモリはミナミヤモリとされてきましたが、遺伝的解析の結果、トカラ列島の小宝島、奄美大島、徳之島にはミナミヤモリと遺伝的に異なる集団がいることが明らかになり、2008年にアマミヤモリとして新種記載されました。

## 2 固有種が多く存在する

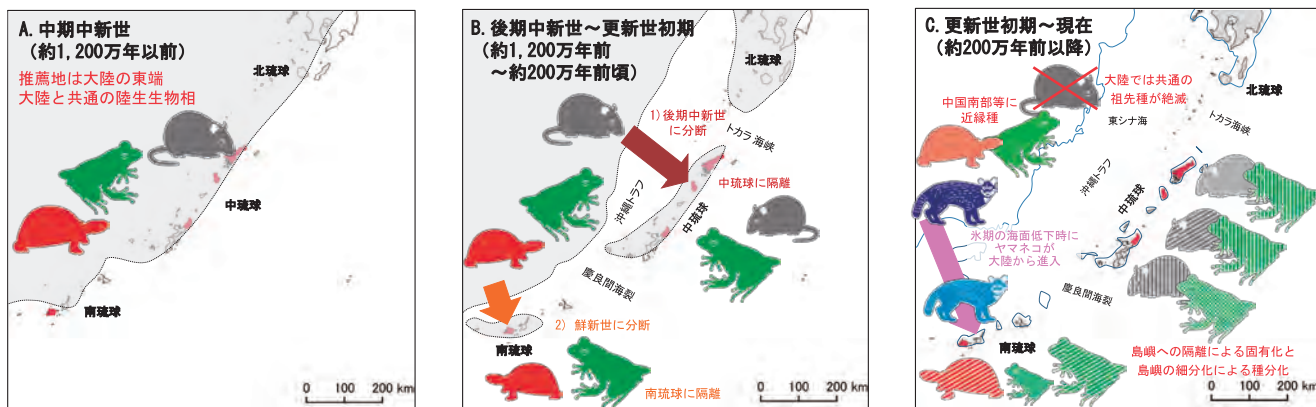
奄美大島の生物相は、後期中新世(約 1200万年前～ 500万年前)までに大陸から分離されました。その際、大陸に存在した捕食者が島にいなかったため、大陸では捕食者の影響で絶滅したアマミノクロウサギなどの生物が、奄美大島では固有種として現在でも遺存しています。

また、奄美大島は他の島嶼と分離された歴史が長く、島で個別に進化した生物が、現在では固有種・固有亜種<sup>2</sup>として見られます。

「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」の世界遺産一覧表記載推薦書(日本政府, 2019)では、奄美大島でこれまでに確認されている生物は、維管束植物1,307種(うち固有種125種)<sup>\*</sup>、哺乳類13種(うち固有種8種)、鳥類315種(うち固有種2種)、陸生爬虫類16種(うち固有種10種)、両生類10種(うち固有種9種)、陸水生魚類154種(うち固有種9種)、昆虫類3,254種(うち固有種695種)、淡水甲殻十脚類14種(うち固有種3種)とされており、多数の固有種等が確認されています。奄美大島の代表的な固有種・固有亜種として、アマミノクロウサギ、アマミシカワガエル、ルリカケス、アマミデングなどがあげられます。

※: 亜種・変種を含む

### 琉球列島の古地理と生物の動向の推定図



〔出典:「世界遺産一覧表記載推薦書 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島(仮訳)(2019年1月 日本政府)」をもとに作成〕

### 奄美大島に生息・生育する代表的な固有種・固有亜種

区分	種名
哺乳類	アマミノクロウサギ、ケナガネズミ、アマミトゲネズミ、オリイジネズミ
鳥類	ルリカケス、アマミヤマシギ、オオトラツグミ(亜)、オーストンオオアカゲラ(亜)
爬虫類	ハブ、ヒメハブ、ヒャン、アマミタカチホヘビ、バーバートカゲ、アマミヒメトカゲ、アマミヤモリ
両生類	アマミイボイモリ、アマミシリケンイモリ、オットンガエル、アマミハナサキガエル、アマミシカワガエル
陸水生魚類	リュウキュウアユ(亜)、ハヤセボウズハゼ、キバラヨシノボリ、アヤヨシノボリ、ミナミアシシロハゼ、ミナミヒメミズハゼ
昆虫類	アマミマルバネクワガタ、ウケジマルバネクワガタ(亜)、マルダイコクコガネ、フェリエベニボシカミキリ、エグリタマミズムシ、アマミヤンマ(亜)、アマミサナエ(亜)、アマミルリモントンボ(亜)、リュウキュウハグロトンボ(亜)
陸水生甲殻十脚類	アマミミナミサワガニ、リュウキュウサワガニ、サカモトサワガニ
植物	アマミデング、トリガミネカンアオイ、グスクカンアオイ、カケロマカンアオイ、フジノカンアオイ、ナゼカンアオイ、アサトカンアオイ、ミヤビカンアオイ、オオバカンアオイ、アマミイウチワ、アマミクサアジサイ、アマミアワゴケ、ヒメミヤマコナスビ、アマミナツトウダイ、アマミヒイラギモチ、アマミスミレ

※ここでは琉球列島に固有なものを対象とし、固有亜種には(亜)を付した。

〔出典:「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島世界遺産一覧表記載推薦書 付属資料3-2:種リスト(2019年1月 日本政府)、「日本産爬虫両生類標準和名リスト(2024年3月11日版 日本爬虫両生類学会)」をもとに作成〕

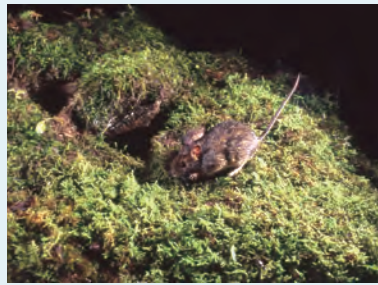
### 2 固有種・固有亜種

「固有種」とは、地球上でその地域にしか生息・生育・繁殖しない生物種のことです。「固有亜種」とは、同じ種の集団が地理的に隔てられることで地域的に分化したもので、他地域の集団との遺伝的な特徴の差や形態の差が見られます。その地域の固有種や固有亜種がいなくなることで、種そのものや、地域的に特徴のある集団の絶滅につながるため、保護対象として重要なものです。

### 奄美大島に生息・生育する代表的な固有種



アマミノクロウサギ ★



アマミトゲネズミ ★



アマミイボイモリ ★



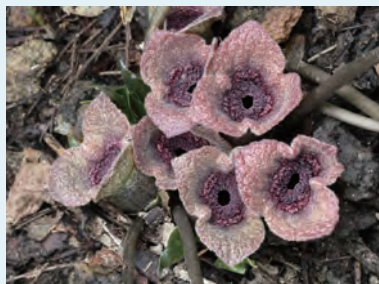
アマミイシカワガエル ★



ルリカケス ★



トリガミネカンアオイ ●



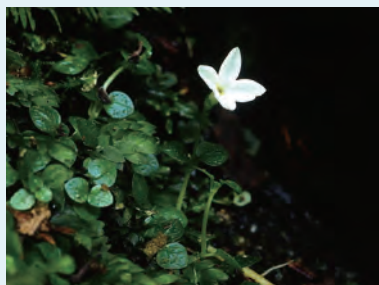
アサトカンアオイ ●



アマミイワウチワ ●



アマミクサアジサイ ●



アマミアワゴケ ●



アマミナツトウダイ ●



アマミデング ●



アマミヒイラギモチ ●



アマミスミレ ●



フェリエベニボシカミキリ ★

(写真: ★浜田 太、●山下 弘)

### 3 奄美大島の特異な気候が生んだ希少な動植物が存在する

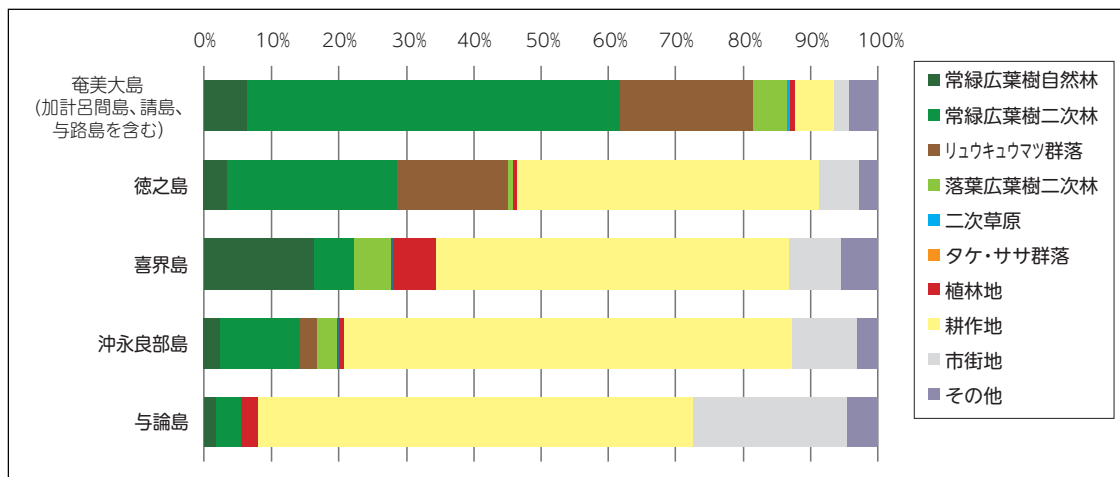
奄美大島は、黒潮の影響を受けて、世界の亜熱帯地域でも限られた地域にしか成立しない湿潤な亜熱帯多雨林（常緑広葉樹林）が発達しているという特徴があります。

また、同じ気候条件にある奄美群島の中でも、奄美大島は特に、

- ・ 多くの森林が維持されており、森林域の連続性が保たれている
  - ・ 高い山があり、特異な気候がもたらす大量の降水により、大きな河川が多い
  - ・ 降水量が多いときには、川岸には周期的に冠水する溪流帯も存在している
- など、他の島では見られない多様な生態系を有しています。

このような深い森林や豊かな河川と特異な気候が生んだ多様な自然環境に適応し、奄美大島には、さまざまな希少な動植物が生息・生育しています。その中でも、人為的な影響などによって特に減少が見られるために保護が必要な種等については国や県、市町村の法令によって、105種が希少野生動植物種に指定されています。

島嶼別植生区分面積割合



【出典：鹿児島大学、平成 22 年度持続的な地域づくりに資する琉球弧の世界自然遺産登録に向けた課題と方策に関する検討業務報告書資料編、生物多様性戦略策定資料集（鹿児島県）より転載】

※環境省の自然環境保全基礎調査 第6・7回植生調査（1999～2024年）の植生図GISデータを用い、統一凡例の大区分で面積を集計して島面積に対する割合を求めたもの。奄美大島と徳之島のGISデータは2008年公開のため、2010年代のマツ枯れ被害拡大以前の状況を反映しています。現在は、マツ枯れ被害が沈静化に伴い、リュウキュウマツ群落の割合が大きく減少していることに留意が必要です。

#### 奄美大島における希少野生動植物種指定状況（国指定、県指定、市町村指定）

分類群	種数 <sup>*1</sup>	国指定	県指定	市町村指定
哺乳類	7	7	0	0
鳥類 <sup>*2</sup>	4	4	0	0
爬虫類	1	0	1	0
両生類	4	3	0	1
魚類	6	0	4	2
昆虫類	15 <sup>*3</sup>	6 <sup>*3</sup>	0	9 <sup>*3</sup>
甲殻類	10	0	4	6
貝類	4	0	3	1
腕足類	1	0	0	1
植物	54	5	15	34
合計	105	25	27	54

\*1：国・県・市町村指定の合計（重複して指定されている場合は1種と数えた）

\*2：鳥類は奄美大島で通年生息する留鳥のみを対象とした。

\*3：ヒメフチトリゲンゴロウは、種の保存法で特定第二種国内希少野生動植物種に、奄美大島5市町村の希少種保護条例による指定に重複して指定されている。

【出典：以下の1～4をもとに作成】

1：国内希少野生動植物種一覧（令和7年2月現在 環境省）

2：県指定希少野生動植物一覧（令和7年6月現在 鹿児島県）

3：希少野生動植物は県民みんなの宝です（希少野生動植物パンフレット）奄美群島版（令和7年3月）

4：鹿児島県の維管束植物分布図集－奄美群島版（令和4年2月 鹿児島大学総合研究博物館）

## 4 世界的に重要な生物多様性に富んだ自然がある

奄美大島は、徳之島・沖縄島のやんばる地域・西表島とともに、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」として2021年(令和3年)に世界自然遺産に登録されました。登録にあたっては、「島々の成り立ちを反映した独自の生物進化を背景として、多数の固有種や地球規模での絶滅危惧種の保護のために世界的に高い価値を有し、琉球列島の中部と南部の独特で豊かな生物多様性の保全にとって、きわめて重要な生息地を含んでいる」ことが遺産価値として認められました。

これに先立って、2017年には、亜熱帯照葉樹林を中心とする生態系全体を管理する「生態系管理型国立公園」、人間と自然が深く関わり調和してきた関係そのものを対象とする「環境文化型国立公園」として、奄美大島(加計呂麻島、請島、与路島を含む)、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島が「奄美群島国立公園」に指定されています。このうち、奄美大島には特別保護地区3,806ヘクタールを含む33,717ヘクタールの特別地域、628ヘクタールの普通地域(陸域)、213ヘクタールの海域公園地区が指定されています。

また、保護林として「奄美群島森林生態系保護地域」(うち、奄美大島は2,045ヘクタール)と「アマミノクロウサギ等希少個体群保護林」(1,334ヘクタール)が2013年3月に設定されています<sup>3</sup>。

さらに、日本の重要湿地500の中での7箇所が存在する他、Birdlife Internationalによる「重要鳥類生息地(Important Bird Areas:IBA)」とConservation International Japanによる「生物多様性の保全を進める上で鍵となる地域(Key Biodiversity Area:KBA)」として奄美大島全域が指定されているほか、WWF(世界自然保護基金)がIUCN(国際自然保護連合)、UNEP(国連環境計画)とともに策定した「世界環境保全戦略」でも奄美大島を含む南西諸島の生物多様性が世界的に重要であることが指摘されています。



奄美群島国立公園(大島海峡) [写真: 浜田 太]



森林生態系保護地域(金作原原生林) [写真: 浜田 太]

### 奄美群島国立公園(うち、奄美大島。単位: ha)

市町村名	特別地域					普通地域 (陸域)	合計 (陸域)	海域 公園地区	普通地域 (海域)	合計 (海域)
	特別保護地区	第1種	第2種	第3種	小計					
奄美市	2,453	3,562	6,514	355	12,884	341	13,225	144		
大和村	407	965	3,699	57	5,128	0	5,128			
宇検村	153	1,940	2,065	0	4,158	0	4,158		23,414	23,627
瀬戸内町	793	1,610	6,683	0	9,086	169	9,255	69		
龍郷町	0	39	2,422	0	2,461	118	2,579			
計	3,806	8,116	21,383	412	33,717	628	34,345	213	23,414	23,627

2020年(令和2年)2月26日現在(単位: ha)

[出典: 「奄美群島国立公園 公園計画書(令和2年2月26日) 環境省」をもとに作成]

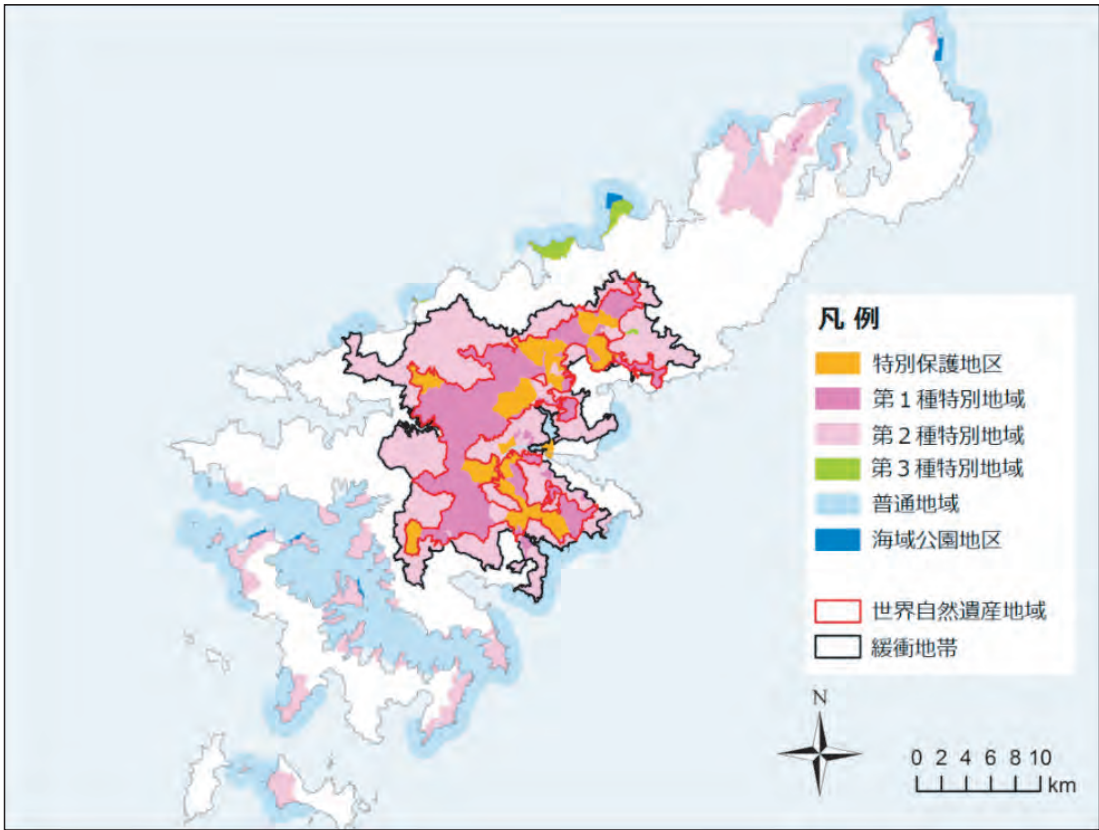
### 奄美大島の保護林

区分		地区	面積(ha)
奄美群島森林生態系保護地域	保存地区	金作原	241
		神屋	161
		八津野	329
	保全利用地区	金作原	218
		神屋	469
		八津野	627
合計			2,045
奄美群島アマミノクロウサギ等希少個体群保護林		安木屋場等11林班	1,334

[出典: 「奄美群島森林生態系保護地域計画(平成25年3月) 九州森林管理局」をもとに作成]

### 3 希少個体群保護林

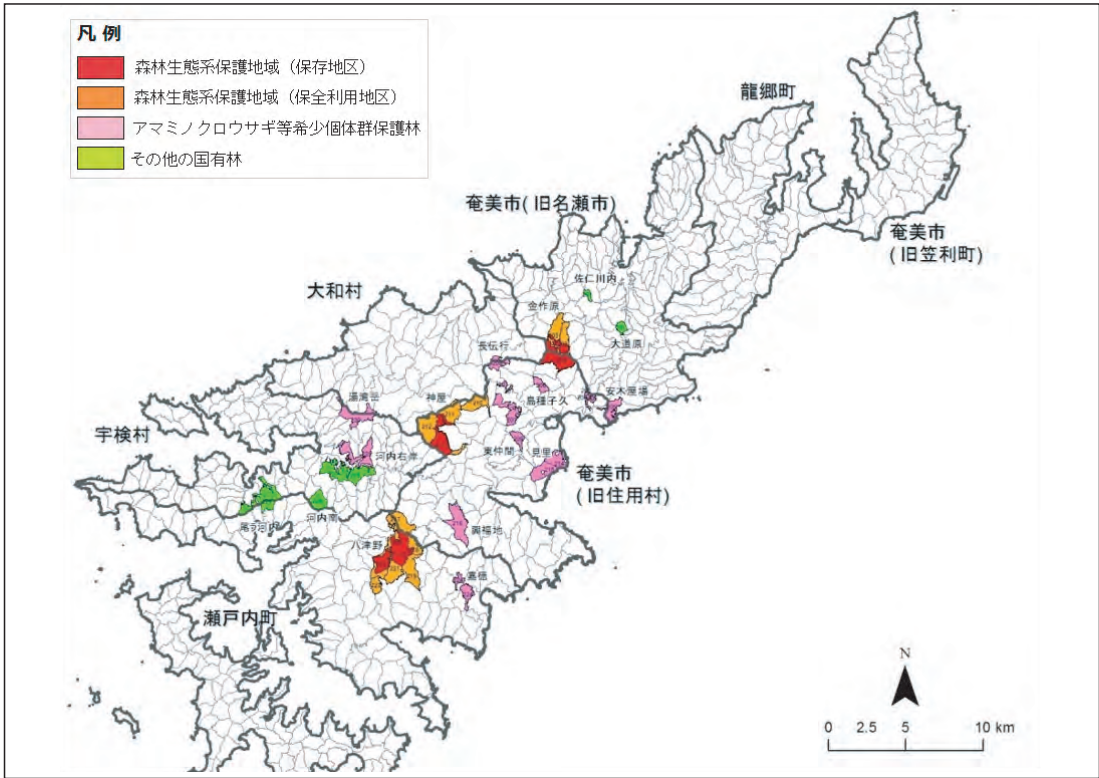
2013年の設定当初は「奄美群島特定動物生息地保護林」でしたが、2015年の保護林制度改正に伴い、「林木遺伝資源保存林」及び「植物群落保護林」とともに、「希少個体群保護林」として再編されました。



奄美群島国立公園指定区域及び、世界自然遺産地域等

(出典：世界遺産一覧表記載推薦書 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島 (仮訳) (2019年1月) 日本政府をもとに作成)

★奄美群島国立公園の自然、土地利用、保護地域、環境文化などについて、  
詳しくは、[奄美群島国立公園自然環境アトラス2023](#)へ



森林生態系保護地域・希少個体群等保護林

(出典：「奄美群島森林生態系保護地域 (九州森林管理局ウェブサイト)」をもとに作成)

## 5 人と自然との関わりの中で培われてきた自然がある

喜子川遺跡などに見られるように、旧石器時代にはすでに奄美大島で人の営みが行われていました。それ以降、狩猟、漁労、稲作、畑作を通じた人と自然との関わりが続いており、人と自然との長い関わりの中で形づくられた里地・里山・里海のような人と自然が共生する地域は、奄美大島の生物多様性を高める要因の一つとなっています。

また、この地域は、生産性が高く、現在の2倍近い人が暮らしていた昭和初期（1920年代後半）においても、島外からの物資に大きく依存することなく人々を養うことができました。一方で、各集落（シマ）には、周辺の自然を持続的に利用するための約束事や、生活の中に循環の仕組みを活かすための知恵と技があり、今日までそれが残されています。それは自然を畏敬し、自然と共生する生活文化そのものであり、ショチョガマや平瀬マンカイなど各地に残るアラセツ（豊年祭）行事やケンムン<sup>4</sup>伝説などの中にも息づいています。

また、豊かな自然は、農林水産業の恵みだけでなく、奄美黒糖焼酎や本場奄美大島紬などの特産品の製造や、エコツーリズム<sup>5</sup>・グリーンツーリズム<sup>6</sup>・ブルーツーリズム<sup>7</sup>や森林・海洋による癒やしを求める活動などの観光産業を生み出しました。さらに、田中一村の作品をはじめとして、奄美大島の自然が絵画や写真、文学などの題材として新たな価値や文化を創出しています。

このように、奄美大島には、世界自然遺産や国立公園のような公的な保護地域以外も含めて、人の営みと自然が共存してきた結果として生物多様性が効果的に保全されている里地・里山・里海のような場所や、地域の伝統文化のために活用されている自然がある場所が多く存在しています。このうち一部は、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている地域として、国による「自然共生サイト」の認定<sup>8</sup>を受けています。



エコツアー

〔写真：(株) マングローブ公社〕



ショチョガマ

〔写真：浜田 太〕

### 4 ケンムン

奄美の森に棲むと言われている妖精・妖怪、自然の守護者とも言われています。

### 5 エコツーリズム

自然環境や歴史文化を対象とし、それらを体験し学ぶとともに、対象となる地域の自然環境や歴史文化の保全に責任を持つ観光のありかたのことです。

### 6 グリーンツーリズム

農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動の総称を言います。

### 7 ブルーツーリズム

島や沿海部の漁村に滞在し、魅力的で充実したマリライフの体験を通じて、心と体をリフレッシュさせる余暇活動の総称を言います。

### 8 自然共生サイト

ネイチャーポジティブ実現に向けた国の取組の一つで、企業の森や里地里山、都市の緑地など、民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている地域を「自然共生サイト」として認定する仕組みです。

## コラム 奄美大島における「自然共生サイト」の取組

世界目標である30by30目標の達成に向けては、OECM (Other Effective area-based Conservation Measures: 保護地域以外で生物多様性保全に資する地域) を増やすことが重要とされています。

国内では、2023年度から、国による「自然共生サイト」の認定が始まり、2024年度末までに全国で企業の森や里地里山、都市の緑地など328か所が認定されました。このうち、奄美大島内のサイトは3か所です。

「アマミノクロウサギ・トラスト3号地」は、スダジイやリュウキュウマツなどからなる二次林で、龍郷町の森林地帯に位置しています。このサイトは、ナショナル・トラスト活動の趣旨に賛同した元の所有者から申請者に託されたものです。その後、人為的な手を加えずに守られ、アマミノクロウサギをはじめとする希少な生きものが生息する豊かな森林となっています。

申請者名：公益社団法人日本ナショナル・トラスト協会

「奄美大島 真米(まぐむ)の里 秋名・幾里・大勝」は、奄美群島でも水田が残る数少ない地域である龍郷町の秋名集落、幾里集落、大勝集落に位置する水田です。耕作放棄地を再生して、稲の自然栽培を行うことで、カエル・イモリ類やゲンゴロウ類など、さまざまな生きもののすみかとなっています。田植えや稲刈りは環境学習の機会になり、稲わらは地域の伝統文化である秋名アラセツ行事にも用いられています(p.29 コラム「アラセツ行事」参照)。

申請者名：一般社団法人 奄美稲作保存会

「瀬戸内町 ネリヤカナヤの海」は、漁業が盛んな瀬戸内町に位置し、ホンダワラ類の藻場やメヒルギのマンブローブ、サンゴ礁、砂浜を含む沿岸域です。漁業資源を維持するために、行政・漁協・地域が連携して、藻場やサンゴ礁の食害対策、マンブローブ植栽などを行っています。これらの活動は、魚類やアオウミガメなどにとって重要な生態系を守るだけでなく、地元の子供たちに環境学習の機会を提供しています。

申請者名：瀬戸内漁業協同組合、瀬戸内町

2025年度からは、自然共生サイトを法制化した「地域生物多様性増進法」<sup>9</sup>が施行されています。この法律は生物多様性を増進する活動計画を認定するもので、すでに豊かな生物多様性を維持する活動だけでなく、生物多様性を回復・創出する活動も新たに対象<sup>10</sup>となりました。2025年9月時点で、全国で201か所が法に基づく認定を受けています。

今後も、ネイチャーポジティブの実現と30by30目標の達成に向けて、民間を含む地域の取組がますます広がることが期待されています。

★自然共生サイトについて、詳しくは[こちら](#)



龍郷町の真米の里 秋名・幾里・大勝 [写真：龍郷町]



瀬戸内町のネリヤカナヤの海 [写真：瀬戸内町]

<sup>9</sup> 地域における生物の多様性の増進のための活動の促進等に関する法律(令和6年法律第18号)

<sup>10</sup> 法に基づく認定を受けた自然共生サイトのうち、「維持タイプ」は保護地域との重複を除いてOECM国際データベースに登録されます。また、「回復タイプ」・「創出タイプ」も活動によって生物多様性の価値が認められるようになれば、保護地域との重複を除いてOECM国際データベースに登録されます。